

(1) 日本海は池のような海だとよく云われるが、それは、大洋に比較して、池ぐらいのちつぱけな海だと云う程度の意味である。

日本海は池のような海だとよく云われるが、それは、大洋に比較して、池ぐらいのちつぱけな海だと云う程度の意味である。

池のような小さい海洋であっても、その本来性を充分知つて、それを人々の為に活用するのは、いつの時代でも色々の制約があつて、並大抵のことではない。

池の開りには今のところ四つの国々があつて、それらの間に物や心の交流が殆どない始末であるから、今のところこの海は遠古において文化の交流を厳然と遮断した大洋のような存在となつてゐる。

こうした存在が今世紀には、どんな面からみても不自然だから、早く池のような状態にしたいと云うのが多くの人々の念願だと見えて、対岸貿易の開始や、沖合漁業の問題等が切実な話題となつてゐるのは看

過することが出来ない。

しかしながら、ここに私共が関心をもたないではいられない問題の一つに沿海州出漁の問題がある。

かつてのこと軍艦などの護衛もあつて、日本海側各府県の漁船がアメリカ湾、ビタ一世湾、ボストン湾等の大陸柵に出漁し、そこで得た底魚の豊漁を回顧し、今までその地での再操業を一方的に念願するとしたら、そうした考え方へ左袒することが出来ないのである。

水産資源の実情がわかり、その実情によく適した漁業がなされることが近代漁業の理念である。この故に池を周囲する国々は共同協力して、実態を把握するためにつとめ、その結果にもとづいて協議会を開催して、予報の適中率を高めるため三月下旬の好材料となつた。

今年度新潟県日本海側における 大羽イワシ漁況予報を回顧して

丹羽正一

このような事情のもとに日本海区水産研究所からいわし予報が発表され、それが満了したことは漁業者がこれで年間漁獲量は最高四〇〇万貫から最低六〇万貫と大きな変動を示している。

こんな訳でいわしの来游状況を一刻も早く知りたい気持が強い。

このような事情のもとに日本海区水産研究所からいわし予報が発表され、それが満了したことは漁業者がこれで年間漁獲量は最高四〇〇万貫から最低六〇万貫と大きな変動を示している。

こんな訳でいわしの来游状況を一刻も早く知りたい気持が強い。

連絡ニュース

発行所
日本海区水産研究所
印刷所
第一印 刷 所
株式会社

かつて軍艦を伴つたような侵略的な漁業に対する郷愁を心残りなくとも切つて、資源の実情調査から山來する開拓方針を有無相通する話合の上に樹立すべきである。ことは日本海をして池たらしめる為に私が払わなくてはならない一つの努力である。

(日本水研所長)

観測等調査方法に対する努力が払われて来た結果予報は局部的に見れば多少の違いはあつたにしても稍々適中し、漁業者は試験研究機関の業績に対して信頼を寄せるようになつてきた。

ふりかえつて、予報を出す吾々は、当初二~三年は稍々適中し、意を強くしてはいたが昨年より雲行は怪くなり始め、本年は全く逆となり、唯一の誇としていた此の予報に対しても自信を失うに至つた「本年のしが来游するか否かの予報を出したのがいわし漁況予報の最初であつたと思う。」

大羽いわし漁業は、新潟県は勿論のこと、石川以北の沿岸漁業者にとって重要な漁業であるのでこの漁業に大きく期待している。ところが、この漁業は豊凶の差がはげしく、県下全般的に見ると年間漁獲量は最高四〇〇万貫から最低六〇万貫と大きな変動を示している。

こんな訳でいわしの来游状況を一刻も早く知りたい気持が強い。

なぜ予報がはずれたか、又本年の予報をなぜ予報がはずれたか、又本年の予報を

主なる項目		第66号
日本海	内橋	潔
大羽イワシ漁況予報を回顧して	丹羽正一	正一郎
昭和31年度能登以北におけるいわし漁況予報検討会	神藤正三郎	西村
・鮮度保持講習会		
・島根水試序官竣工紹介		
・海をたがやす		
・皇太子殿下新潟県に行啓		
・日本海底魚資源開拓促進協議会		
・第12回日本海沿岸技術連絡会		
・機船底曳網漁業に関する懇談会		

所を中心とし、石川以北六県の水試が参加し、予報の適中率を高めるため三月下旬の好材料となつた。

その後日本海区水産研究所

出す迄の経過等について日頃考へてゐる事に若干ふれて見たい。従来吾々が予報を出す最大の指針は海況状況特に水温の分布状況に其の根柢を求めていたところに欠陥がありそんでいるのではないかと考えられる。わずか過去二、三年の資料をいじり廻してあら複雑な海況を論じ、又漁況を予察する事は危険と云うより外はないと考えられる。幸い、吾々が予報を出し始めたこの二、三年は、持続性より同じ状態が続いたため割合楽に予報が適中したのではないかと考えられる。

いわし予報に対し従来の海況特に水温分佈、オソリーラの態度から先ず抜け出す必要がある。いわし魚群の生態、魚種組成、気象条件、生活史等各種の分野から眺めなおす必要がありこの点からも関係者が相互に研究しなおす必要があるのでないかと思われる。

いわしの研究会、対馬暖流のシンボジウム等においても、いわし漁況予報技術の基礎的項目の研究発表がおこなわれてないのが不思議に思われる。

最後に本年のいわし漁況予報の失敗にござりる事なく、これを機会に吾々が従来行つて來た予報技術を検討し、予報に対する適中率を高める事が漁業者に対する吾々の義務でないかと考えられるのである。

(新潟県水産試験場技師)

七月十六日新潟市において
日本水研、石川県以北各県水試
場長および担当官約二十五名
が参集し、今春の北部日本海
大羽いわし漁況予報の検討会
が開催された。会議の内容は
次の通り

昭和31度能登以北における 大羽いわし漁況予報検討会

(1) 本年度大羽いわしの漁況予報と実際について

各県における説明があり活潑な論議、見解が交換され、本年の著しい特徴が明らかにされた。

(4) 昭和三十一年度大羽いわし漁況

	石川	新潟	秋田	山形	青森
一七〇万	大豊漁	四六万	二三万	三八万	不漁
不漁	不漁	不漁	不漁	不漁	不漁
五年平均より9%減					

(1) 不漁の各県の魚体は一般に小型魚、未熟卵魚が多く、青森における魚体と全く対照的である。

(2) 昭和三十二年度北部日本海漁況の打合せ……意見の交換が終つて来年度実施する事項について次のとく決定された。

(1) 数量予報は、いろいろの問題があるので今後は予報会議の内容発表にとどめ、各県水試においてこれを参考にする。

(2) 大羽いわし以外の他魚種からの予察を今後充分活用する。

七月十六日新潟市において
日本水研、石川県以北各県水試
場長および担当官約二十五名
が参集し、今春の北部日本海
大羽いわし漁況予報の検討会
が開催された。会議の内容は
次の通り

(1) 本年度大羽いわしの漁況予報と実際について

各県における説明があり活潑な論議、見解が交換され、本年の著しい特徴が明らかにされた。

一般に日本海北部の漁村では、地理的環境の影響もあって、漁獲物の鮮度保持に対する関心が極めて薄い。長崎から移入したイワシにわざわざ砂をつけて、今朝獲れたてのイワシだと称して農村に行商に行くといわれている程である。地元消費が多い関係もあるが、冬期間は勿論夏期においても漁業者が氷を使用することは極めて少い。イカの如きも氷を使用すると変色すると称し、六、七月の候でも殆んど氷を使用しないで、遠距離に輸送する場合に初めて、市場で氷を使用する程度であるから、食中毒等の食品衛生上からは勿論、漁獲物の商品価値の向上という点で重大な問題である。

(1) 鮮魚介の取扱いについて

六月二十日 新潟市
二十二日 村上市
七月四日 佐渡真野町
五日 両津町

(2) 講師及び演題

新潟県衛生部係官
佐渡真野町
両津町

(2) 魚の鮮度及びその保持方法について

六月二十日 新潟市
二十二日 村上市
七月四日 佐渡真野町
五日 両津町

(3) 水の需給状況について

新潟県冷凍協会 中井理事
新潟市

三、懇談会

(日本水研)

島根水試庁舎竣工紹介

神 薩 正

われわれ島根水試の職員が久しう待望し且つ全県下の漁民が漁業技術センターとして大きな期待と信頼を寄せてゐる水試の庁舎が、この程漸く竣工した、新庁舎は浜田市瀬戸ヶ島の一角に鉄筋コンクリート二階建の白堜の雄姿をどしど構へ、狭いながらも事務室、漁撈科室、製造科増殖科室

資源調査室、図書室、標本室、場長室、会議室、宿直室等を備え、これに連なる小使室、湯沸場等の附属屋が二〇坪、右手指の船員控室、網作業室、倉庫が延六〇坪、工費約一、〇〇〇万円を要している。建築物としては新築で、既存の製造工場五坪、第二倉庫三〇坪、第一坪、水産開発室、兼実習場六〇坪、発育年隊教室、三五坪共浴場、三五坪、同隊宿舎坪、三倉庫一八坪、三倉庫三〇坪、第二倉庫坪、第三倉庫坪、同様全部であります。

マイワシ、サバなどのような洄游性魚類の場合には、産卵親魚數と、それに由來する年級群の大きさとは比例関係ではなくて、後者は前者とは独立に、発生初期のきわめて短かい期間における死亡率によつて決定されると考えられている。この発生初期の死亡率は一般にきわめて大きく、かつ環境条件の完全な支配下にある。したがつて、環境条件の変化に対応して初期死亡率がごく僅かに変化しても将来の年級群の大きさに顕著な変動をひきこすであろうと推定されている。

この発生初期の死亡率を、年々、なんらかの方法で知ることができれば——あるいは、とくに重要なことであるが、環境条件との関連の下に、それを推定することができれば——将来の年級群の大きさ、ひいては資源の大さきを予知する上の大きなかがりとなるであろうし、さらにまたこれができれば、資源の積極的な増産も不可能ではない。

ところで、発生初期の年級群、すなわち卵及び稚魚群に対して、このように大きな死亡率をひきおこす原因はなんであらうか？ これに対しては、食害、病気、物理的化學的刺戟による死亡、饑餓などが考えられるが、これらがすべて同一の強度で働いているわけではない。これまでの調査の結果によれば、マイワシの場合では、これらの諸原因のうちで饑餓による稚魚の死亡が最も大き

あるが、その時の稚魚の口腔の大きさはきわめて小さいから、摂取しうるコベボーダ幼体の大きさもおのづから限定されてしまう。このような好適な餌料動物は必ずしも豊富ではない。

したがつて、もし、卵黄吸収直前の状能の稚魚が浮遊している水塊内にコベボーダを盛んに繁殖させ、稚魚に豊富な餌を供給してやることができるれば、マイワシの初期死亡率はぐんと小さくなり、それから由来する年級稚魚は大きなものとなるであろう。コベボーダの繁殖の制限因子については不明だが、もし餌料であるとすれば、その餌料とは硅藻プランクトンであるから、マイワシの産卵場附近に肥料を投下して硅藻プランクトンを増殖せしめればよい。マイワシの産卵場は主として沿岸の渦流域に形成されるものであるから、肥料の投下は必ずしも実行困難な計画ではないだろう。

しかし、こうして硅藻プランクトンを繁殖させてやつても、夜半虫などのような害虫に食われてしまつてはなんにもならないから、肥料の投下とともに、害虫の駆除を行ふ必要がある。

現在、われわれは資源研究という名前で、主として漁獲量の制限による資源の恒久的維持の方法を研究しているが、今後は、前述のような資源の積極的な増産、すなわち海の農耕ということについても研究を進める必要がありにあるのではないかうか。

総延坪四三七坪に達している。屋上には天気予報信号旗が掲げられ、司令官からマイクで拡声機によつて港内の試験船及び漁船に指示を与えることが出来、船が沖合に出勤しているときには近くの水試漁業無線局から連絡することが出来る。又店舗内の各室には無線電話「ノーベルフォン」があり、自効交換装置によつて幾組でも同時に通話が可能である。給水施設は市の水道が低圧で漏水で戸ヶ島附近は戸内は殆んど出ないので、夜間供水の下の大タンクに貯えられ司令官

る仕組みになつてゐる。便所のことまで述べるのは聊か面白ひいが浜田には珍しい水洗式である。

ところで、この建物を建造するまでには予算獲得上幾多の困難があつた。昭和十八年の秋から丸二年もの間、もみにもんだ掲句漸く決まつた最後案は起債一、〇〇〇万円、寄附金三五〇万円を財源とするぎりのものであつた。然し幸なことに県漁連、郡漁連、底曳漁連、まき網漁連等の各会長が進んで水試整備後援会を組織し、寄附金募集に協力されたので、万事好調裡に進み、県下全水産関係業者の協力を得て、募金予定額を一五〇万円も上廻る好成績を収めたのである。

さて何はともあれ待望の庁舎は出来上つた。これから如何にして漁民の期待に副い要望に応えて行くか。これは仲々むつかしい問題である。単に本場庁舎が出来たからといって急に島根の海況が変り、漁獲が増大するというわけのものでもないから差し当り從来の試験研究を地道に継続する以外に方法はない。ただ私はかねてから漁民に対する指導方針として沿岸漁業者には、漁業技術の改良普及を、沖合漁業者の内、まき網漁業者に対する海況漁況の速報を、底曳漁業者に対しては新漁場の開発をもつて瘤ることにしてゐる。そして今後もなお臂くはこの方針で行けるものと確信している。勿論技術の改良普及にしても、現在で最も魚業面のよく實現されてゐる事は、

て毎旬漁況予報を実施しつつある段階であり新漁場の開発も初めは沖合魚礁の調査であつたものが、昨年は岐阜北方海域の深海底曳試験断行となり、本年は石見沖一帯の深海漁場開発を実施しつつある。又迴遊魚の調査も拙速ながら、イワシ、サバからイカ、サンマへと漁業の要望に応えて進展しつつある状況で、純粹な研究者の立場から見れば笑止千万なやり方ではあらうが、地方水試の在り方としては斯くある事も止むを得ないものと思つてゐる。さらに、最後に附け加えたいことはこの新序音はわれわれ水試員が占拠する象牙の塔であつてはならないという事である。水産業發展のためならば時によつて國の研究所員の詰所ともなり又県の技術普及員の研修の場所となり、更には県下漁民の熱心な研究討論の会場ともなつて、常に関係者に開放され且つ自由に出入できわれわれと膝をまじえて水産技術を論じ明日の水産を語り合う場所としたいことを切に希つてゐる。

(筆者：島根水試場長)

皇太子殿下新潟県に行啓

生物特に魚族の生態に多大の御関心があり、その道の研学に精進中の皇太子殿下は去る七月一六日越後入り、一八日には渡加茂湖のカキ養殖、一九日相川町達者の新大理学部爐海寒天研究所を御見学になつた。尙、一八日には新潟市の知事公告において日本水研内構所長の「硬骨魚の中核神経の形態と機能の問題」についての御進講を四〇分間に亘つてきかれた。(日本水研)

秋田県主催の標記協議会が七月一二日秋田市で開催、石川——青森各県関係業者及水產課長、日本水研所長等出席。議題はかつての沿海出漁当時の漁獲状況などの各県からの報告があり、続いて今後の具体的な促進方法について協議された結果、六県協力して、日本海底魚資源開発調査等を行うと共に沿海州沖合出漁を促進するための有効適切な運動をなすことになった。(日本水研)

第十二回日本海

海洋技術連絡会

第一回日本海海洋技術連絡会は六月二九日第八、第九管区海上保安本部、舞鶴海洋氣象台、新潟氣象台、日本海区水產研究所の関係機関が參集して、日本水研講堂で開催された。議題ならびに研究発表は左記の通り。

議題(議長：福島第九管区水路部長)

一、観測資料の交換について
第八管区では年四回の観測結果を速報しているが、これを九管区と一本にしてやる案もある。資料の交換は從前どおりでよいとした。

また第八管区と日本水研の間で漁業者の觀測データに対する利用度について意見の交換があつた。

二、各機関の事業及び予定計画
海上保安庁一二月、五月、八月、十一月の年四回定期的に日本海冲合の定線観測を実施する。
舞鶴海洋氣象台II經ヶ岬沖N線を毎月一回、五月上、中旬に山陰沖を、七月より八月にかけて北陸、山陰沖合をそれぞれ観測する。
日本水研は本年四月天鷹丸で、北部日本海沖合観測を実施した。来る八月より九月にかけては蒼鷹丸による日本海冲合観測を実施する。

三、規約改正の件
第四条の年二回総会開催を年一回(十二月上旬)新潟と舞鶴で交互に開催する事、本年の十二月には開催しない事、新規約は日本水研で後日印刷送付する事が承認された。(日本水研)

研究発表(座長：浦井鎮吾、谷岡克己)

一、漁業資源の数量的予想と海況因子との関係について 山中一郎(日本水研)
二、経ヶ岬沖の水温の年度変化について 谷岡克己(舞鶴海氣)

三、昨年夏発見した能登沖の新礁及びその

漁業価格について 下村敏正(日本水研)

四、春の日本海大羽イワシ漁況と10線について

五、日本海南部海流観測報告(五月) 松本信保(八管区)

六、昭和卅一年五月の観測結果について 永田俊一(日本水研)

五十嵐三雄(九管区)

七、漂流物の漂着地域と気象、海象について
八、補償流の性格をもつ冷水域について
宮田和夫(日本水研)
九、イワシ類の卵分布と春の日本海大羽イカ漁況について 深瀧弘(日本水研)
十、能登西岸定置網漁況と海況について

(日本水研)